

松江市八雲林間劇場 しいの実シアター

アートマネージャー

有田 美由樹

コロナ禍における劇場の取組と今後の課題

1) 稽古もできない 本番もできない

2020年、劇場ができて、25年目にしてはじめて、「全国公募で出演者募集！」という触れ込みで、昆虫記を書いたフェアブルの痛快愉快な作品づくりに取り掛かった。全国公募という新しい風、新しい手法を求めての取組は順調にスタートし、2021年2月には17人の俳優たちは活き活きと稽古を始め順調に進んでいた。まもなく立稽古に入るため、舞台いっばいに大道具をセットした矢先、新型コロナ変異ウィルスが感染急拡大となった。いろいろ悩んだ挙句、国内各地から集まってくるキャスト、スタッフのことを考えると、公演計画を中止せざるを得なくなった。

2) 屋内がだめなら、屋外は？

稽古もできない、本番もできない、そんな中で考えた。

何もやらないわけにはいかない。

劇場の中でできないなら、屋外ではどうか。

そこで今までいつかやりたいと思っていた劇場まわりの自然の景観を磨くことにした。そうだとすれば、演劇に興味のない人だって、その心地よさに触れたくて遊びにくるかもしれない。そうした人たちを劇場見学に誘い込み、やがて観劇へと導く……。

実は、数年前から自然の樹木デザインのできる専門家を広島から招き、地元の造園業社長と一緒に3000坪のシアター敷地の樹木について考え始めていた。地元造園業では、日本庭園の庭師が剪定を中心とした造形美を創り出す。そのため、山の景観やシアターの多数の樹木を自然のまま美しくデザインする体験はほとんどない。地元の社長は、最初は木を「切る」ことに抵抗されたが、実際に切ってみて、近景、中景、遠景が美しく見えるようになることを実感された。

これが、2021年秋の紅葉時に実施した「焚き火の楽しさとゴーシュ音楽の夕べ」となり、2022年春の「森の劇場でお花見を！」に繋がった。焚き火では300名を超える来場者があり、お花見では800名を超えた。そうして、訪れた人たちは、必ずと喋っていいほど、劇場を見学し、「ここで演劇を観たい」と言っていた。



図1 桜が咲き始めたしいの実シアター



図2 「焚き火の楽しさとゴーシュ音楽の夕べ」

3) 試行錯誤で迎えた5回目の「しいの実シアター未来学校」

2016年度から始めた「しいの実シアター未来学校」は、子どもたちの日々の暮らしから失われてきた「暮らし体験」と、劇場の役割である「芸術体験」を組み合わせた事業である。毎年夏休みの3日間、シアターで体験活動が続けてきた。プログラムは外部講師と劇場スタッフが組立てて、「暮らし体験」では包丁やマッチの使い方、簡単な料理、配膳、片付けなどの生きる力をつける活動を指導し、「芸術体験」では、人形劇の人形の作り方や操作方法などを指導してきた。そして、事業4年目には、この「指導する」ということに気づき、「決して指導していたつもりは無かったが、子どもたちの反応をみると結果的に指導していたのではないかと悩み、事業の行き詰まりを感じ始めていた。

4) 窓のある劇場

5年目の2020年度は、コロナで事業中止を決断したが、2021度はどうするか。悩んだ

末、「しいの実シアターには窓があるではないか！」劇場に窓があれば再々換気はできる。よし！ 今年は十分な感染対策を行なって実施しよう！ と、定員 20 名募集で広報した。ところが、予想を上回って 40 名の申込があり、結局は 35 名で実施。チラシの表題を「劇であそぼう」にしたことで、コロナでどこにも行けない子どもたちの興味をつかんだようだ。

5) 夢のような 3 日間

2021 年 8 月 4 日（水）～6 日（金）の 3 日間、客席 108 席、5 間×3.5 間のステージと半アウトドア風に作られた小さなロビーのしいの実シアターで、指導しない「未来学校」が始まった。

松江市全域からやってきた小学校 1 年から 6 年までの混合集団が 3 つのグループに分かれ、劇づくりに取り組む。出会いの最初は硬い表情だったが、「すぐに仲良くなるゲーム」で打ち解けていった。あとは、大人は笑顔で見守り、相談されたら自らも楽しんで応える。そうして、子どもたちの自主性と驚くほどの発想力と改善力で、どんどん進んでいった。彼らは夢中になり、スタッフが「休憩して、水分補給だよ！」と声をかけると、「さっき水なんだ」「トイレも行った」「休憩したくない、やらせて！」と言う。「塩分チャージのキャンディあげるよ！」と言うと、仕方がないという風にしてやっと手を止めた。この集中力はなんだ！ まるで「ごっこ遊び」に興じる幼児のようではないか。3 日目の劇発表の時間では、客席に集まった保護者たちを前に、主役も脇役も道具係も照明担当も、皆が大いに楽しんで伸び伸びと発表できた。劇場建設時に、電気料金の維持費を計算してやむを得ず窓のある劇場となったが、実はこのことで換気が簡単にでき、安全に、かつてないほど楽しくできた。

子どもたちの感想の中に「自分がかんばった、というより、まわりに引き込まれて、いつの間にかかんばっていた」とあるように、皆が主体的で、実にいい空気が満ちていた。活動を終えた子どもたちが家でも主体的に行動していたり、目を輝かせて友だちができた喜びを語る姿などに親たちもびっくり。子どもたちにとっても、保護者にとっても、劇場スタッフにとっても夢のような感動の 3 日間だった。



図 3 劇発表の練習中の子どもたち

<今後の課題=夢>

近い将来、多くの子どもたちにとって、しいの実シアターは「とても楽しい場所」として親しまれ、それが大人にも高齢者にも障害者にも伝わって、四季を通してくつろげる場所になっていき、公演や国際演劇祭に通い慣れることで演劇の持つ力を理解し、柔軟で国際的な感性や思いやりをもつことができるようになればと願っている。

「未来学校」では夏休みの1週間、子どもたちだけが運営する「子ども劇場」をオープンさせたい。家族連れや大人たちは子どもたちの手作りのポスターを見てチケットを購入し、子どもたちの案内で劇場に入り、客席に座って開演を心待ちにし、子どもたちだけで上演された作品を観て、思わずスタンディングオベーションという風にならないか、と。その子どもたちの発想力のすごさに刺激を受けて、大人たちはさらに頑張って「演劇によるまちづくり」を行なってほしい、と。

<お知らせ>

幼児から高齢者までを対象に11月5日（土）～13日（日）まで開催する2年延期の国際的催事、「松江・森の演劇祭」を実施する予定です。どうぞ、お出掛けください。